
「撃剣を使う少年」撃剣シリーズ第二話

介護さぶらい（かいごさぶらい）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「撃剣を使う少年」 撃剣シリーズ第一話

【ZPDF】

Z9574P

【作者名】

介護せがりー（かごーせがりー）

【あらすじ】

剣道少年が古流の剣術を目の当たりにして、異変が起る。

(前書き)

現代剣道の原点は、日本古来から連綿と伝えられてきた、古武術です。竹刀は刀です。しかし、その使い方や技は全く違ったものになつてしましました。少年はどうして古流剣術に魅了されたのか。

「エーイ、ヤーッ、エーイ！！」の、きょうう声と竹刀や防具がぶつかり合う音が入り混じる。かかり稽古に夢中になる少年、少女のマメ剣士達は、息が上がるまで、竹刀を無一無二に打ち込む。相手をする担当教士達も気は抜けない。

「やめーい！」騒擾を打ち破る声が響いた。剣士達は一斉に礼をし、竹刀を納刀、馬背を割るように両端へ退く。

「誰も怪我はないかー！」道場の上座から、師範代が。

「はーい！」数十人のマメ剣士達が、力一杯返事をする。

「よーしー、全員礼ー！」下座で、わが子の稽古ぶりを見ていた父兄達も会釈を返す。

「ありがとうございました！」上座に向けて、マメ剣士達が、床に頭をつける。防具をハズすと、何処にでも見かける現代っ子達だ。

道場内を喧騒が渦巻いた。その様を田配りしていた師範代のもとへ。

「師範代、ちょっと」と、かかり稽古の相手をしていた教士の一人が。全体の指導教官で、マメ剣士達の総責任者だ。

「うん、君か、何だね？」

「翔太君のことなんですが、気づかれておられると、思いますが、
、」言いはずらそうに口ごもる。

「猛者が、どうしたんだね、ハッキリ言つてみろ」この教士、府警内でも名うての剣士である。翔太は道場きつての逸材で、指導教官も目をかけていた。

「師範代の先輩のことですので、控えておりましたが」と、言い乍ら、はちきれそうになつてている左腕の筒袖をまくり上げ。

「見てください」と。

「うん、これは、翔太か？」太い腕に紫がかつた、あざが数箇所。

「う～ん」その腕を見て、師範代が唸つた。一ヶ月ほど前から、教士は異変に気づいていた。ある日、翔太との模擬試合形式の稽古だつた。

「イヒーイ、トーウ！！」翔太の竹刀が、眼前に突き出され、交わそうとした瞬間、左の横面を打たれた。避けきれずに、下がると。

「ツエーイ、ツエーイ、ツエーイヤー！！」気合を発し、寄せ足を使つて、突き、横面を髪を入れずに繰り出してくる。鉛のような重い打突が連續して襲つてきた。下がりながら左腕で受け続けた。籠手をつけているのだが、とても、小6の子供とは思えない。あざが、打撃の激しさを物語る。

一ヶ月ほど前、老朽化した府警本部庁舎が立替られ、道場開きが盛大に催された。その折に、道場の無事を祈願するため奉納演武が披露され、古武道関係者が数人招かれた。

「翔太君のことなんですが、突きは禁止ですし、この伝では、相手に大怪我をさせる危険性もあります」もう直ぐ、新中学生の新人選手権大会が始まるのだ。

翔太は今春中学生になる。本人は、何かを会得したらしく、自信満々で異様に張りきっている。

「私も、やられたからな」師範代は、教士の懸念を充分に斟酌できた。先般、新人戦の出場メンバーの選抜テストで、翔太の相手をした。からうじて受けたが、受けた竹刀の上から、横面を打たれ、面防具がズレそうになつた。翔太が、自身の体重を竹刀に載せて打ち込んできたのだ。剣道では、そんなことは、教えない。小学生が、そんな技を使えるわけがない。

奉納演武の招請で、大学時代の先輩が、古流剣術をやっていたのを思い出し推薦した。先輩は気軽に応じてくれたが、懸念もあつた。（子供達が、真剣で竹を斬る古流剣術を生で見たら、多感な年頃だ影響を受ける子も、・・・）。師範代の懸念は、現実になつた。

「竹を斬った先生の道場を教えてください」見学だけなら、と軽い

気持ちで、翔太にせがまれ、先輩の道場を教えたのだ。翔太が、斬り飛ばされた竹を片付けているのを見ていたからだ。

「解った、翔太には、俺から話をしよう。剣道には、ルールがある。君は心配するな」奉納演武で、唯一、試斬を披露したのが先輩だつた。その折の光景は、忘れられない峻烈なものであった。

特殊なコーティング加工で、鮮やかな木目を浮き立たせた道場の中央に、ゆっくり進み出た先輩は、1本の青竹を、倒れないように、そっと立てた。幅5センチ程、高さは約1メートル。青竹から二間ほどの間合いを開け。

「トオーウー、ツェイーヤーッ！」抜刀しながら、一間の間合いを左の寄せ足を小刻みに使って、半間に詰め。気合と共に青竹の上部10センチほどを、片手打ちに切り飛ばした。ものの数秒の演武だった。刀身に己の体重を乗せて斬るのだ。

「先輩が翔太に、、いや、翔太の方から先輩に教わったのだろう」
師範代の胸中は複雑だった。（あの子は、まだまだ伸びるのに）。
一ヶ月ほどが経つた。

「先生、こんにちは、今日も見学をせてもうつていいですか？」ぺ
「ひとつお辞儀をして、翔太が。

「おひへ、久しぶりやな～、翔太君か、かめへんよ！」と、招じる。
稽古用の竹を並べながら。

「新人戦は、どうやった」と、尋ねた。

「はい、一回戦で反則負けしました」

「うん、ん、それでお相手の子は怪我せーへんかったか？」

「はい、だいじょうぶです！」少し、照れたような笑顔を見せた。

「そうか、それやつたらえ～」その後、翔太は剣道を退会、古武道
の門を叩いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9574p/>

「撃剣を使う少年」撃剣シリーズ第二話

2011年6月2日08時13分発行